

仮設から通学 バス1時間

東日本大震災で被害を受けた岩手、宮城、福島3県の沿岸部を中心とした地域で、被災した小中学生向けに運行しているスクールバスの利用者数が20市町村で計約5,100人になることが読売新聞のまとめでわかった。片道20〜30分、1時間以上の遠距離通学を余儀なくされる場合も多い。住んでいた土地から離れ、手狭な仮設住宅で暮らす子供にとっては、大きな負担になっている。対策を求める声が上がっている。

遠距離 小中学生に負担



仮設住宅から約1時間かけて通学する小中学生。国道は渋滞、バスの中では休んでいた(3日午前、福島県広野町)

被災3県 5100人が利用

震災後、原発事故による避難や、仮設住宅が建てられなかったことを受け、バス運行を始める自治体が相次いだ。読売新聞は3県の主に沿岸部42市町村教育委員



福島県広野町立広野小中学校は、児童生徒179人のうち100人がバスで通う。隣のいわき市のJR湯本駅近くにある仮設住宅からは、中学生3人と小学生8人が毎朝午前6時50分発のマイクروبスに乗り込む。皆、すぐに眠ってしまう。

早朝出発、渋滞 車内で眠り込む

児童70人のうち65人がバス通学の宮城県南三陸町立戸倉小。「乗っている時間が長いので疲れる」。4年生の佐藤皓人君(10)は、隣の登米市にある仮設住宅まで片道約28分をバスで帰っていき、つらい。朝は午前7時に家を出る

が、雪や渋滞で1時間20分かかることも。放課後は午後4時前に学校を出なければならぬ。同小の近くにあった自宅は津波で全壊。震災3か月後に今の仮設住宅に移った。「朝は6時に起きなければいけない。帰りは疲れて寝てしまう」ともある。「母親の克己さん(45)は話す。同小では半数近い児童が今も仮設住宅で暮らしている。

被災した小中学生向けのスクールバス利用者が多い自治体 (今年1月現在)

宮城・石巻市	854人(8%)
宮城・南三陸町	573人(62%)
岩手・陸前高田市	466人(34%)
宮城・東松島市	360人(11%)
岩手・釜石市	319人(14%)
宮城・女川町	313人(77%)
福島・飯館村	241人(94%)

※カッコ内は全児童生徒数に占める割合

会の対象にアンケートを実施。震災前から運行していたバスを除いて集計した。それによると、震災の翌2012年(一部は13年)、被災した小中学生向けのバスの利用者は3県28市町村の計7951人になった。その後、被災者の移住が進んだことなどにより減少したものの、今年1月現在、一部は昨年4〜12月現在の利用者は依然として、岩手で7市町1417人、宮城で8市町2511人、福島で14市町村1229人の計5157人となっている。854人が利用する宮城県石巻市教委の担当者は、「引越後も元の学校に通ったり、学校が別の場所の仮設舎に移ったりしたケースが多い」と説明する。573人が利用する宮城県南三陸町教委の担当者は、「復興工事の車両が行き交い、安全な通学路を設定できないため、近々でもバス

通学をさせている子供もいる」と話す。利用率は、原発事故で全町避難が続く福島県の浪江、双葉、大熊、富岡の4町で100%。バスの運行距離(片道)は長いところで、福島県の楡葉町、広野町で38分、浪江町で35・4分におよんだ。

東京学芸大の朝倉隆司教授(健康社会学)は、「仮設住宅からのバス通学は、大きな負担になっており早く解消すべきだ。運行がこれ以上長引くようなら、登校後に軽い運動を取り入れるなど、心身に配慮した工夫が必要だ」と指摘する。